

川越市立小中学校適正規模・適正配置審議会（資料）

小中学校の適正規模・適正配置に関する資料集

川越市教育委員会（学校教育部学校管理課）

※委員からの指摘事項等修正済

目次

【審議いただきたいポイント】	1
1 小中学校を取り巻く状況	2
(1) 児童生徒数の推移	2
(2) 学齢者数等の推計	3
① 国・県・市の将来人口推計	3
② 児童生徒数の推計	4
(3) 小中学校の沿革	6
① 小学校	6
② 中学校	7
(4) 小中学校の配置	8
(5) 小中学校の相関	10
① 目標使用年数	11
② 運営コストと更新費用	12
③ 公共施設等総合管理計画との連携	13
2 児童生徒数等の状況	14
(1) 小中学校の現況（令和 6 年度）	14
(2) 今後の見込み（令和 12・18 年度）	16
3 適正規模・適正配置	18
(1) 学校規模の標準	18
(2) 適正配置の考え方	19

【審議いただきたいポイント】

本市の小中学校が置かれている状況を踏まえ、将来的な市立小中学校の適正規模及び適正配置に関して調査審議いただきたい事項について整理すると、次のとおりです。

➤ 適正規模の考え方について

学校規模の標準として、学校教育法施行規則に学級数が示されていますが、地域の実情によって基準に適合しない規模である場合、どのように「適正」を捉えることができるか。

➤ 小規模化への対応について

少子化の進展による児童生徒数の減少により、学校運営上、これまでにはなかった問題が生じてくるおそれがありますが、そのような中で教育環境の改善に向けて、どのような対応ができるか。

➤ 統合等に関する方向性について

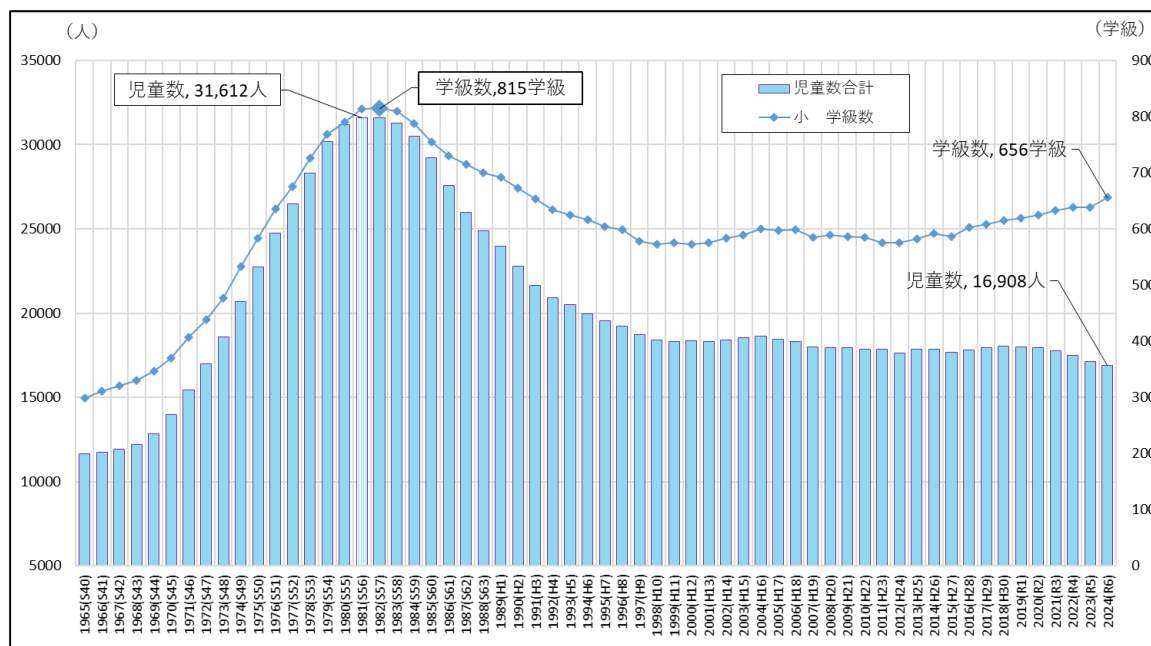
今後、施設総量の適正化を図るためには、学校施設の更新時期に際して、学校や学級の小規模化への対応（統合等）を含めて検討する必要がありますが、どのような場合にどのような対応ができるか。

1 小中学校を取り巻く状況

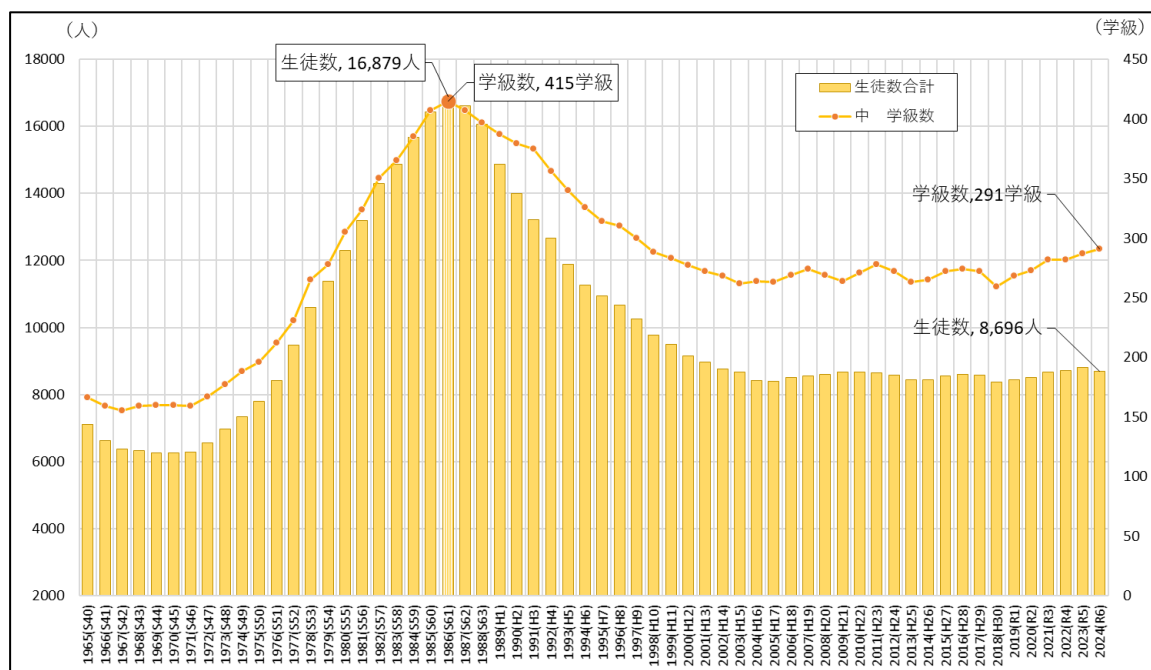
(1) 児童生徒数の推移

本市の市立小中学校の児童生徒数は、小学校で昭和 56 年、中学校で昭和 61 年をピークに減少傾向で推移してきましたが、令和 6（2024）年では、ピーク時と比較すると、小学校で 53.5%、中学校で 51.5%の人数となっています。

図表 1 【市立小学校の児童数・学級数】



図表 2 【市立中学校の生徒数・学級数】



出典：図表 1 及び図表 2 とも、児童数、生徒数及び学級数は、各年度 5 月 1 日時点の「学校基本調査」に基づく数値（特別支援学級を含む）。

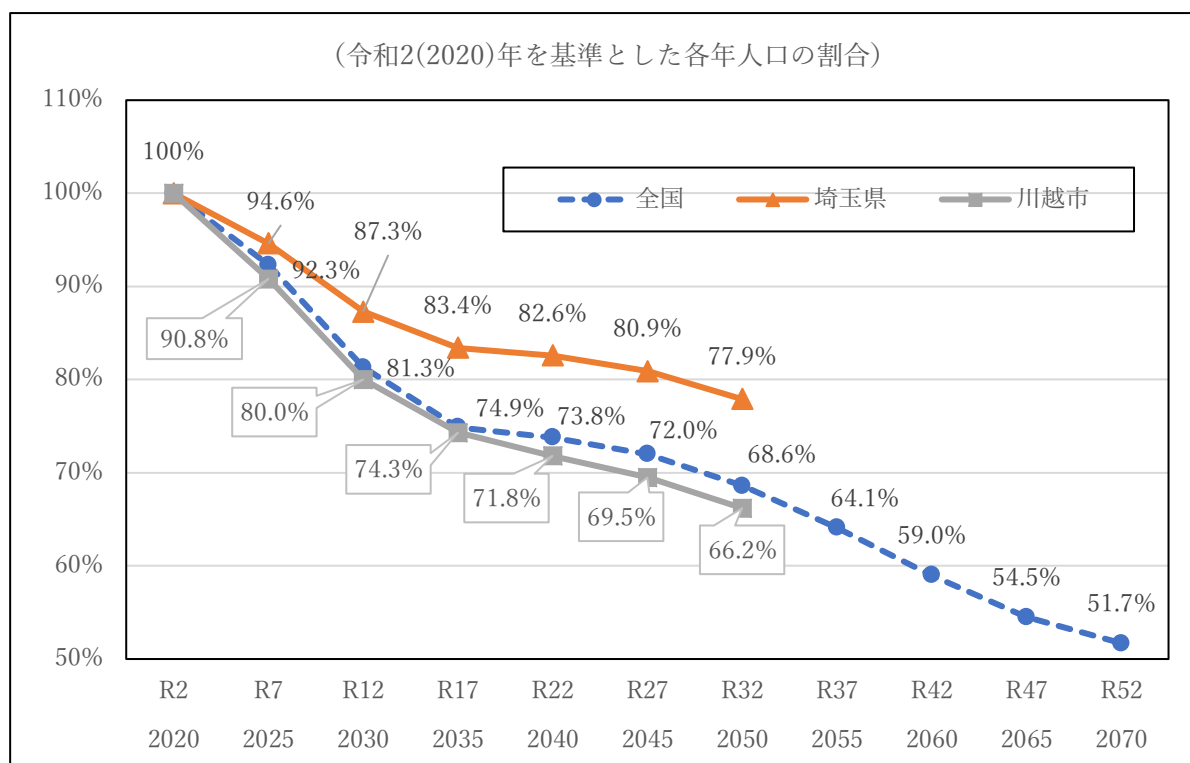
(2) 学齢者数等の推計

① 国・県・市の将来人口推計

令和2(2020)年国勢調査の確定数を出発点とする新たな全国将来人口推計に基づくと、全国の5歳から14歳の人口は、今後の50年間で、51.7%に減少する予測となっています。埼玉県は、全国よりも緩やかな減少で、今後の30年間で、77.9%に減少する予測となっています。

本市は、国、県に比べて減少の度合いが大きく、今後の30年間では、66.2%に減少する予測となっており、小中学校の教育環境を考える上で、大きな影響となることが懸念されます。

図表 3 【5歳から14歳の将来人口推計】



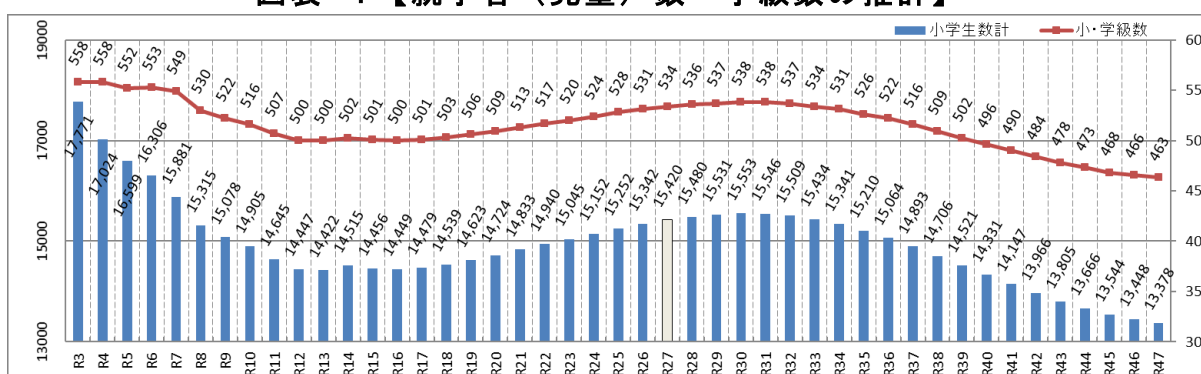
出典：全国は、「日本の地域別将来推計人口（令和5年推計）国立社会保障・人口問題研究所」における1-9A男女年齢5歳階級別人口から算出。

埼玉県及び川越市は、「埼玉県の市町村別将来人口推計ツール（令和5年8月 統計課）」における「分析Ⅰ」シートにより算出。

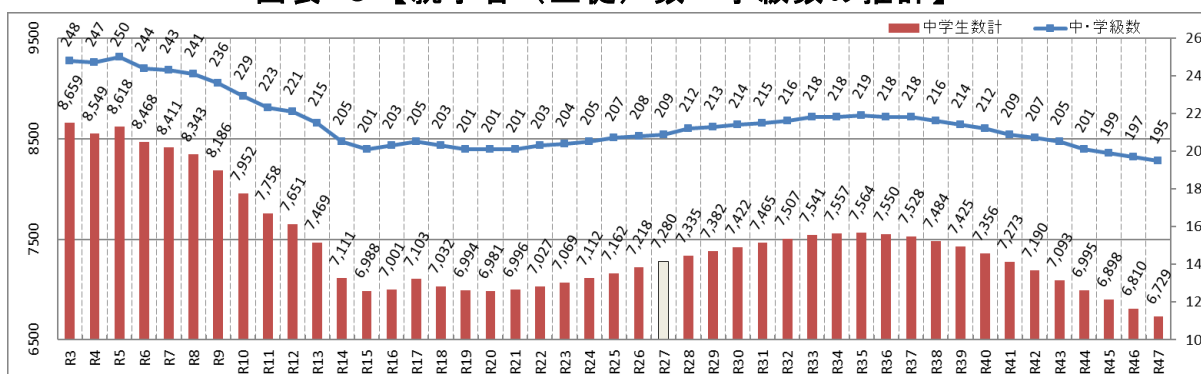
② 児童生徒数の推計

今後の見通しとしては、「川越市将来人口推計（令和元年度推計）」による令和6年の推計人口と、同年度の「学校基本調査」による市立小中学校の就学者数との比率に基づき、将来の就学者数を予想してみたところ、令和47（2065）年の就学者数は、小学校で13,378人（今後2,928人、18.0%減）、中学校で6,729人（今後1,739人、20.5%減）となりました。

図表 4【就学者（児童）数・学級数の推計】



図表 5【就学者（生徒）数・学級数の推計】



出典：令和6年までは各年5月1日時点の実績値（特別支援学級を含まない）。

令和7年以降の就学者数の推計は、「川越市将来人口推計（令和元年度推計）」の令和6年の推計人口の学齢者数と、令和6年度の「学校基本調査」による通常の学級に在籍する児童又は生徒数との比率を算出し、令和7年以降の推計人口の学齢者数に当該比率を乗じて算出した数値。

学級数の推計は、令和6年度の「学校基本調査」による児童数又は生徒数を学級編制の標準で除して得た学級数（小数点以下繰上げ）と実際に「学校基本調査」による通常の学級の学級数との比率を算出し、令和7年以降の「川越市将来人口推計（令和元年度推計）」から前段により推計した学齢者数を学級編制の標準で除して得た数値に、当該比率を乗じて算出した数値。

※ 別冊「地区別シート」参照

「川越市将来人口推計（令和元年度推計）」の地区ごとの推計に基づき、令和6年の推計人口の学齢者数と、同年度の「学校基本調査」による地区ごとの市立小・中学校の就学者数との比率を考慮した上で、将来の就学者数を地区ごとに推計してみました。

（地区は、本庁管内及び各市民センター管内の全12地区。）

《地区別シートの見方》

小 学 校	:	A	校	(学校名: 通学区域の属する部分が大きい方の地区に掲載。)
児 童 数	:	B	人	(推計上: ①, 推定率 ②)
学 級 数	:	C	学級	(算定上: ③, 推定率 ④, 1学級 ⑤)

川越市人口推計 (R2.3) から推定される就学者数・学級数

① 人口推計上の該当年1月1日時点における学齢者数（6歳～11歳又は12歳～14歳）の人数。

② Bの児童数・生徒数を推計上の学齢者数で除した割合（%の小数点以下第3位を四捨五入）。行政区域と通学区域との相違によるもの。

③ Bの児童数・生徒数を学級編制人数で除した場合の学級数（小数点以下を繰り上げ）。小学校は段階的に35人で、中学校は40人で算定。

④ Cの学級数を算定上の学級数で除した割合（%の小数点以下第3位を四捨五入）。

⑤ Bの児童数・生徒数をCの学級数で除した1クラス当たりの人数（小数点以下第3位を四捨五入）。

⑥ 令和27年（総合管理計画が見据える30年後）時の人口推計上の学齢者数に上記②の推定率を乗じた値（小数点以下を四捨五入）。

⑦ 前記⑥の人数を学級編制人数（35又は40）で除した値（小数繰り上げ）に上記④の推定率を乗じた値（小数点以下を四捨五入）。

⑧ 上記⑥を前記⑦で除した1クラス当たりの人数（小数点以下第3位を四捨五入）。

⑨ 上記⑥の令和27年時の就学者数から上記Bの令和3年度の就学者数を減じた就学者数の増減。

⑩ 上記⑦の令和27年時の学級数から上記Cの令和3年度の学級数を減じた学級数の増減。

⑪ 令和27年時の学級数と令和3年度の学級数とを比較した結果。

⑫ 令和27年以後の就学者数が増加傾向である場合はそのピークとなる最大値の年、減少傾向がある場合は令和27年以前の最大値の年。

⑬ 前記⑫の年における推計上の学齢者数に上記②を乗じた就学者数の見込み（小数点以下を四捨五入）。

⑭ 前記⑬の人数を学級編制人数（35又は40）で除した値（小数繰り上げ）に上記④の推定率を乗じた値（小数点以下を四捨五入）。

⑮ 上記⑬を前記⑭で除した1クラス当たりの人数（小数点以下第3位を四捨五入）。

⑯ 上記⑬の就学者数又は上記⑭の学級数からBの児童数・生徒数又はCの学級数を減じた児童数・生徒数又は学級数の増減。

⑰ 人口推計における就学者数の最小値の年（あくまで推計上であって、住民基本台帳の登録者数に基づく推計結果とは異なる）。

令和27年時には、就学児は ⑥ 人と推定、学級数は ⑦ 学級。（1学級 ⑧）

現年度との増減は、児童数で ⑨ 人、学級数の増減は ⑩ 学級の ⑪ が見込まれる。

将来人口推計では、(MAX) ⑫ 年には最多の児童数 (⑬) 人となり、推定される学級数は (⑭) 学級。（1学級 ⑮）

(MIN) ⑰ 年まで減少が続いて、 (⑬) 人となり、推定される学級数は (⑭) 学級。（1学級 ⑮）

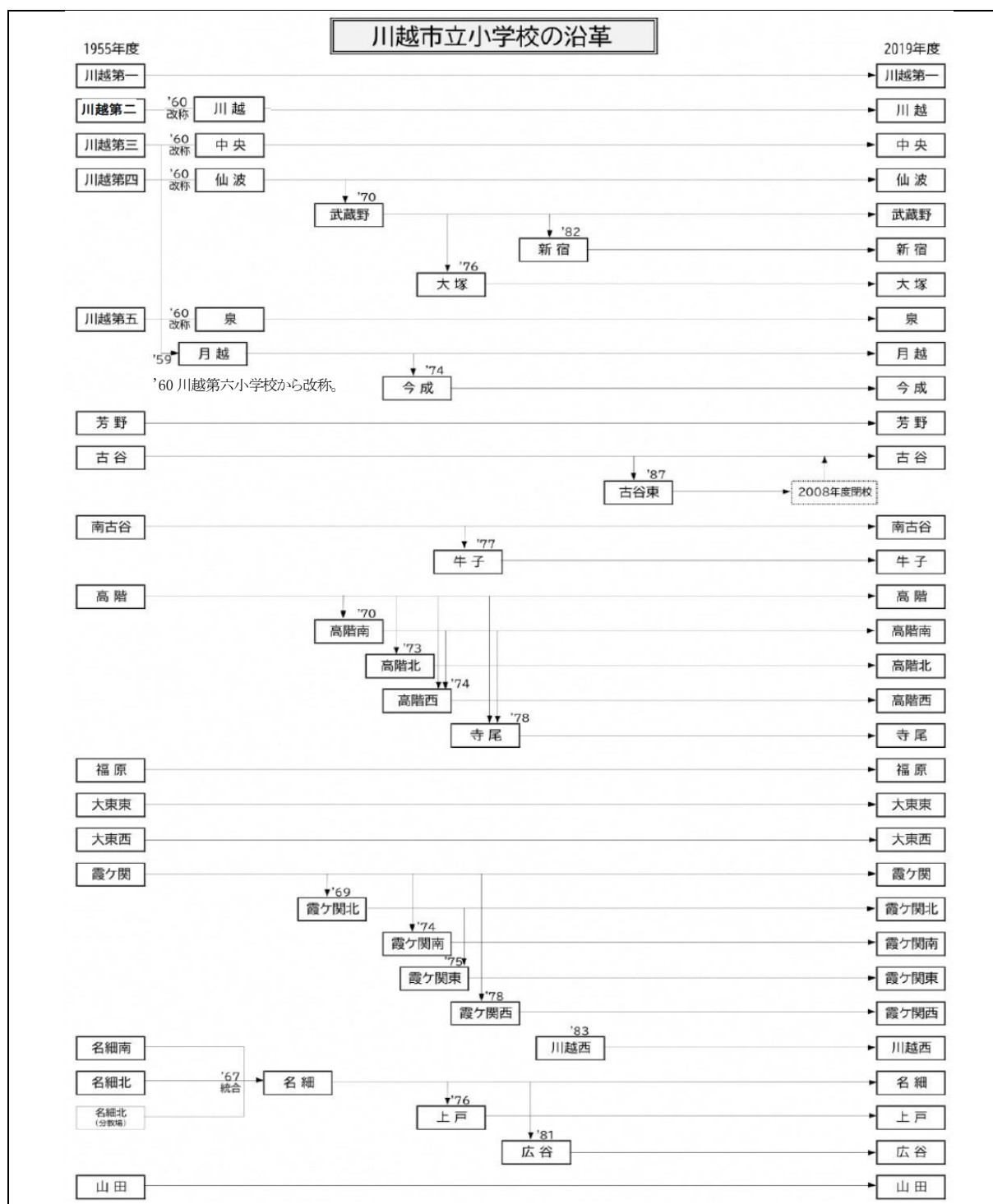
※このシートの数値は、人口推計上の本年度の就学者数を、実際の就学者数に合致させたときの割合を用いて、人口推計の数値を再計算したものです。

(3) 小中学校の沿革

① 小学校

昭和 30（1955）年度には 16 校でしたが、昭和 62（1987）年度には 33 校となりました。平成 20（2008）年度に 1 校が閉校し、現在 32 校となっています。

図表 6 【市立小学校の沿革】



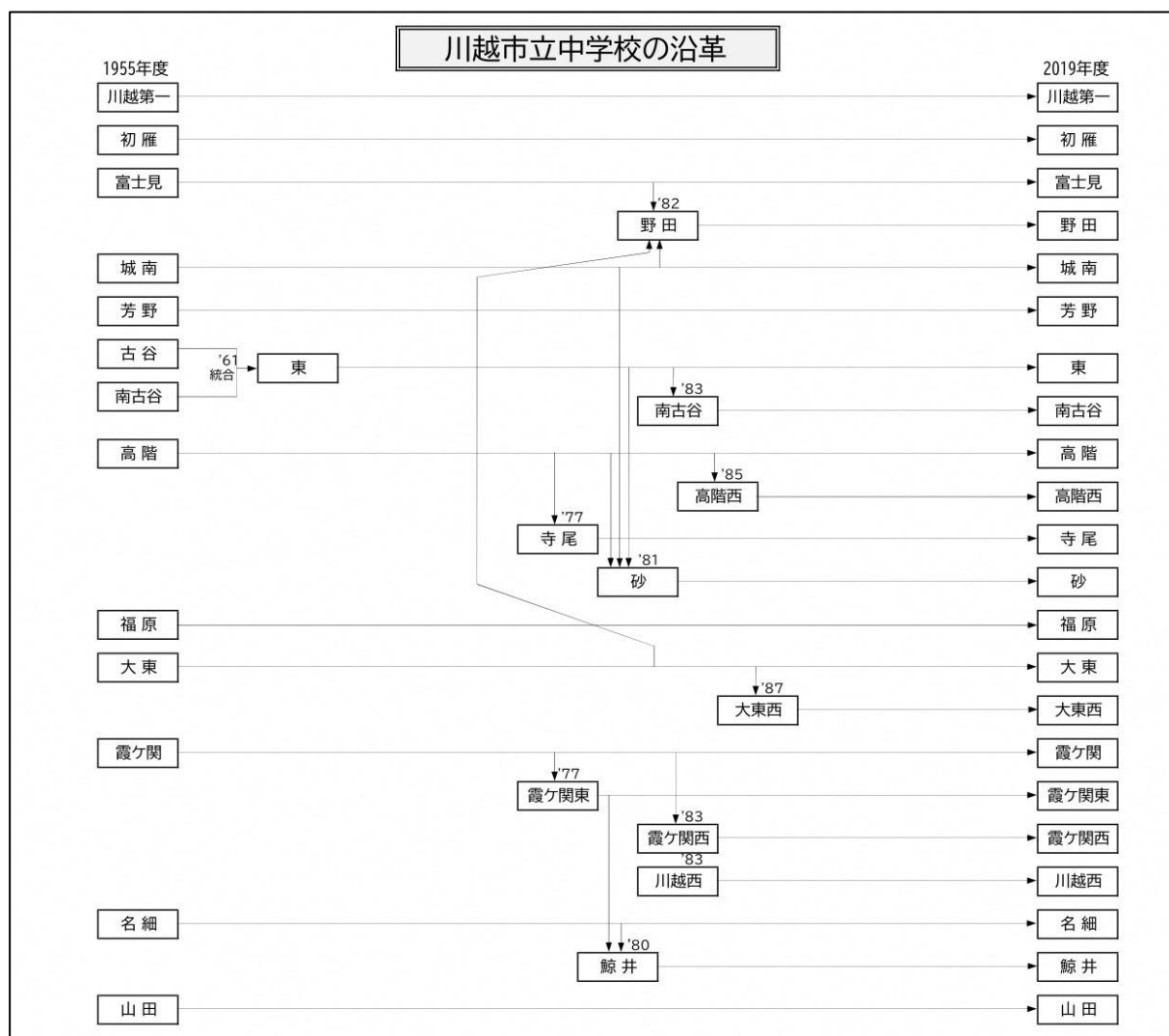
出典：「川越市教育委員会 50 年のあゆみ」並びに川越小及び月越小の「学校沿革誌」を基に学校管理課で作成。

② 中学校

昭和 30（1955）年度には 13 校でしたが、昭和 62（1987）年度には 22 校となり、現在に至ります。

また、現在の市域となった昭和 30（1955）年当時は、合併前の 9 村の村ごとに 1 校の中学校が置かれていました。

図表 7 【市立中学校の沿革】

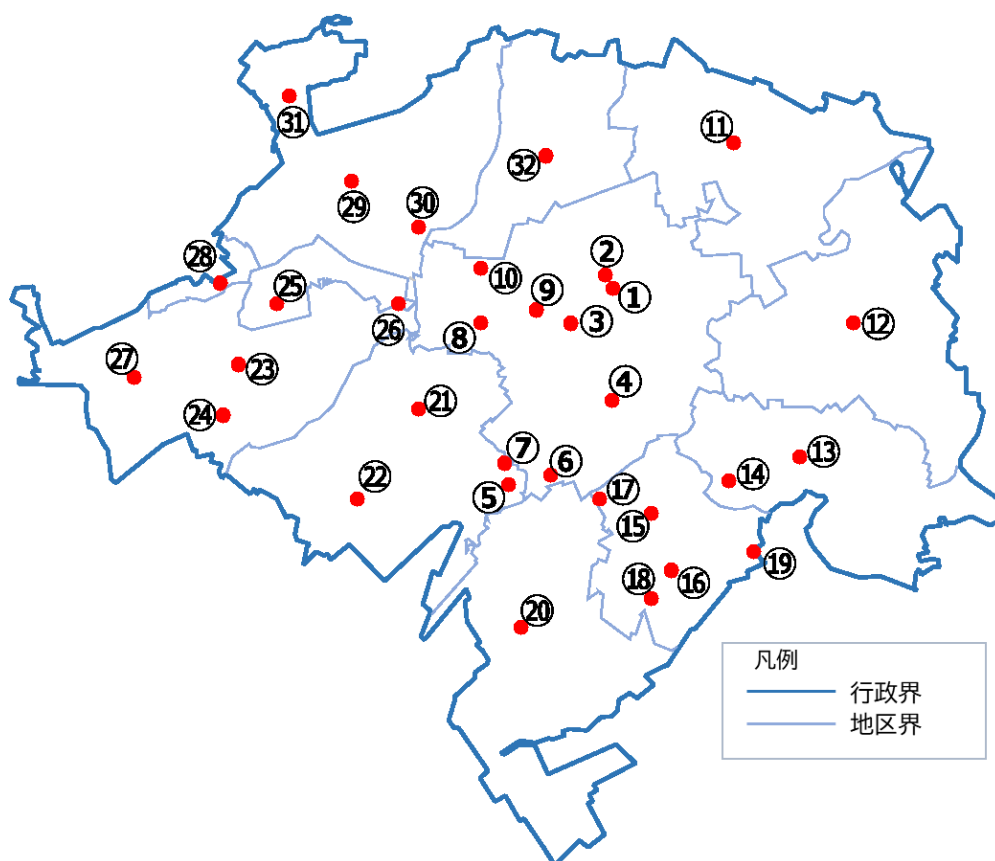


出典：川越市個別施設計画（公共施設編）令和 2 年 10 月

参考：第 2 次ベビーブーム（昭和 46～49 年。1971～1974 年）に生まれた子供は、小学校に昭和 53～61（1978～1986）年、中学校に昭和 59～平成 1（1984～1989）年に在籍。

(4) 小中学校の配置

図表 8 【市立小学校配置図】



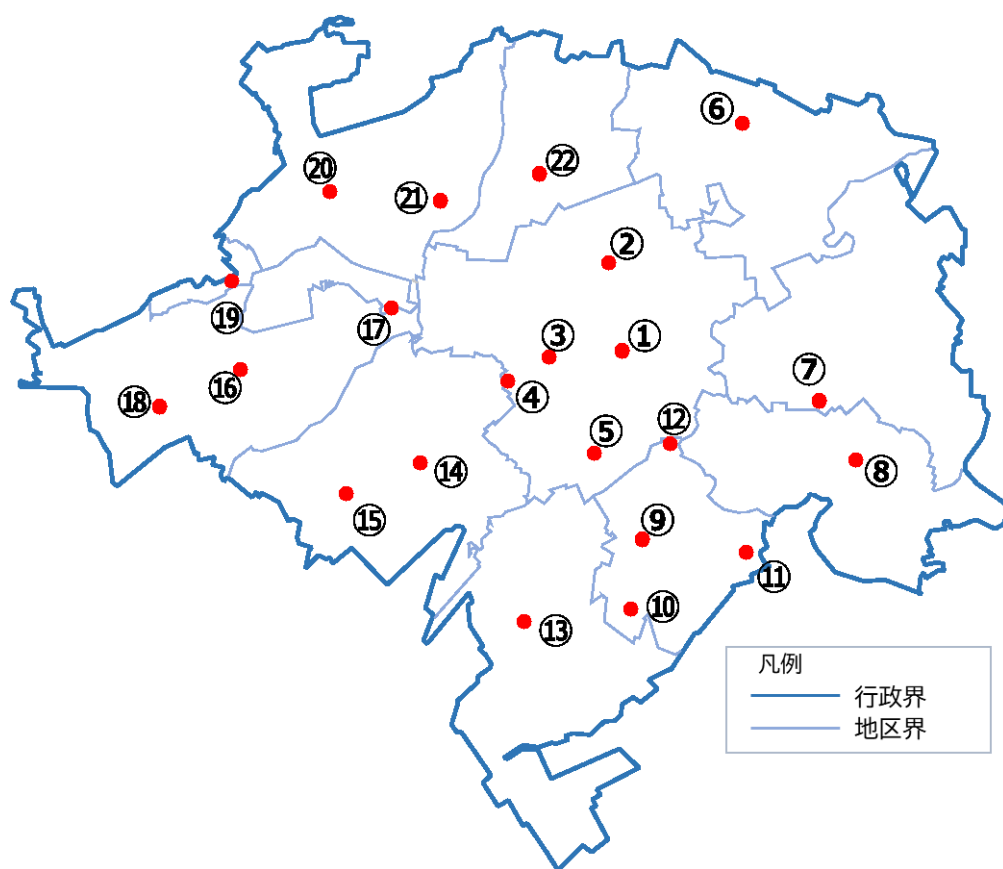
出典：川越市個別施設計画（公共施設編）令和2年10月

図表 9 【市立小学校一覧】

No.	校名	地区	No.	校名	地区	No.	校名	地区
1	川越第一小	本庁	12	古谷小	古谷	23	霞ヶ関小	霞ヶ関
2	川越小		13	南古谷小	南古谷	24	霞ヶ関南小	
3	中央小		14	牛子小		25	霞ヶ関北小	霞ヶ関北
4	仙波小		15	高階小	高階	26	霞ヶ関東小	
5	武蔵野小	大東	16	高階南小		27	霞ヶ関西小	霞ヶ関
6	新宿小	本庁	17	高階北小		28	川越西小	川鶴
7	大塚小※		18	高階西小		29	名細小	名細
8	泉小		19	寺尾小		30	上戸小	
9	月越小		20	福原小	福原	31	広谷小	山田
10	今成小	芳野	21	大東東小	大東	32	山田小	
11	芳野小		22	大東西小				

※ 「大塚小」は、所在は大東地区ですが、通学区域の面積と児童数からみると、本庁地区の割合が高いことから、本庁地区に属する学校として整理しています。

図表 10 【市立中学校配置図】



出典：川越市個別施設計画（公共施設編）令和2年10月

図表 11 【市立中学校一覧】

No.	校名	地区	No.	校名	地区	No.	校名	地区
1	川越第一中	本庁	9	高階中	高階	16	霞ヶ関中	霞ヶ関
2	初雁中		10	高階西中		17	霞ヶ関東中	霞ヶ関北
3	富士見中		11	寺尾中		18	霞ヶ関西中	霞ヶ関
4	野田中		12	砂中		19	川越西中	川鶴
5	城南中		13	福原中	福原	20	名細中	名細
6	芳野中	芳野	14	大東中	大東	21	鯨井中	
7	東中	古谷	15	大東西中		22	山田中	山田
8	南古谷中	南古谷						

(5) 小中学校の相関

市立小学校の卒業生の進学先として教育委員会が指定している市立中学校との相関は、次の図表のとおりです。

図表 12【小中学校進学相関表】

地区			本庁					芳野	古谷	南古谷	高階					福原	大東	霞ヶ関		霞ヶ関北	川鶴	名細		山田	11
	校数	22	5					1	1	1	4					1	2	2		1	1	2		1	22
	32	学校名	川越第一	初雁	富士見	城南	野田	芳野	東	南古谷	高階	砂	高階西	寺尾	福原	大東	大東西	霞ヶ関	霞ヶ関西	霞ヶ関東	川越西	名細	鯨井	山田	22
		相関	3	3	4	4	3	1	3	2	3	3	2	3	2	3	1	2	2	2	2	2	1	1	
本庁	9	川越第一	1	○																					1
		川越	1		○																				1
		中央	2	△		△																			2
		仙波	3	△			△					△													3
		新宿	1				○																		1
		大塚	3				△	△								△									3
		泉	2			△		△																	2
		月越	2		△	△																			2
		今成	2		△	△																			2
芳野	1	芳野	1					●																	1
古谷	1	古谷	1						○																1
南古谷	2	南古谷	2						△	△															2
		牛子	3						△	△		△													3
高階	5	高階	3								△	△		△											3
		高階南	2										△	△											2
		高階北	2								△				△										2
		高階西	2								△		△												2
		寺尾	1											○											1
福原	1	福原	1												○										1
大東	3	武蔵野	2				△									△									2
		大東東	2					△								△									2
		大東西	1														●								1
霞ヶ関	3	霞ヶ関	1															○							1
		霞ヶ関南	2															△	△						2
		霞ヶ関西	1																○						1
霞北	2	霞ヶ関北	2																	△	△				2
		霞ヶ関東	1																	○					1
川鶴	1	川越西	1																		○				1
名細	3	名細	1																			○			1
		広谷	1																			○			1
		上戸	1																				●		1
山田	1	山田	1																					●	1
12	32	32		3	3	4	4	3	1	3	2	3	3	2	3	2	3	1	2	2	2	2	2	1	1

凡例	○：卒業後、全員が同一の中学校へ進学（他の小学校からも進学あり）	12校
	△：卒業後、分散して複数の中学校へ進学	16校
	●：卒業後、卒業生のみで中学校の新入学生（他校からの進学なし）	4校

(6) 校舎等の更新時期等

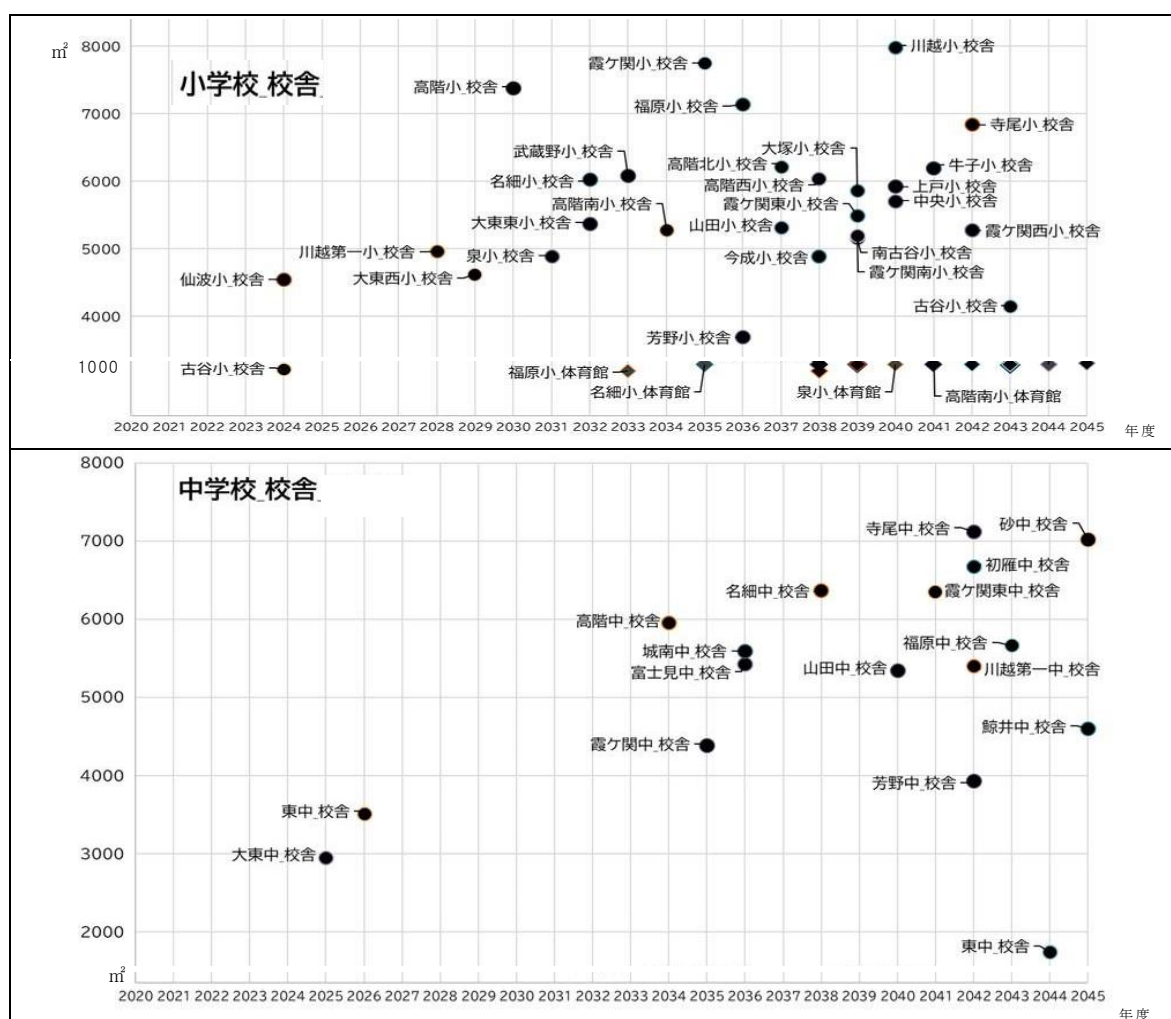
① 目標使用年数

本市個別施設計画では、建築物の更新時期に目安を付け、使用期間の終わりを見据えた改修を実施したり、適切に更新需要に対応したりするため、施設の「目標使用年数」を定めています。

建築年度	目標使用年数	耐震基準
1981 年度まで	65 年	旧耐震基準
1982 年度から	65 年超	新耐震基準

今後、この目標使用年数に達する小中学校は、次の図表のとおりです。

図表 13 【令和 27（2045）年までに建築後 65 年が到来する小中学校施設】

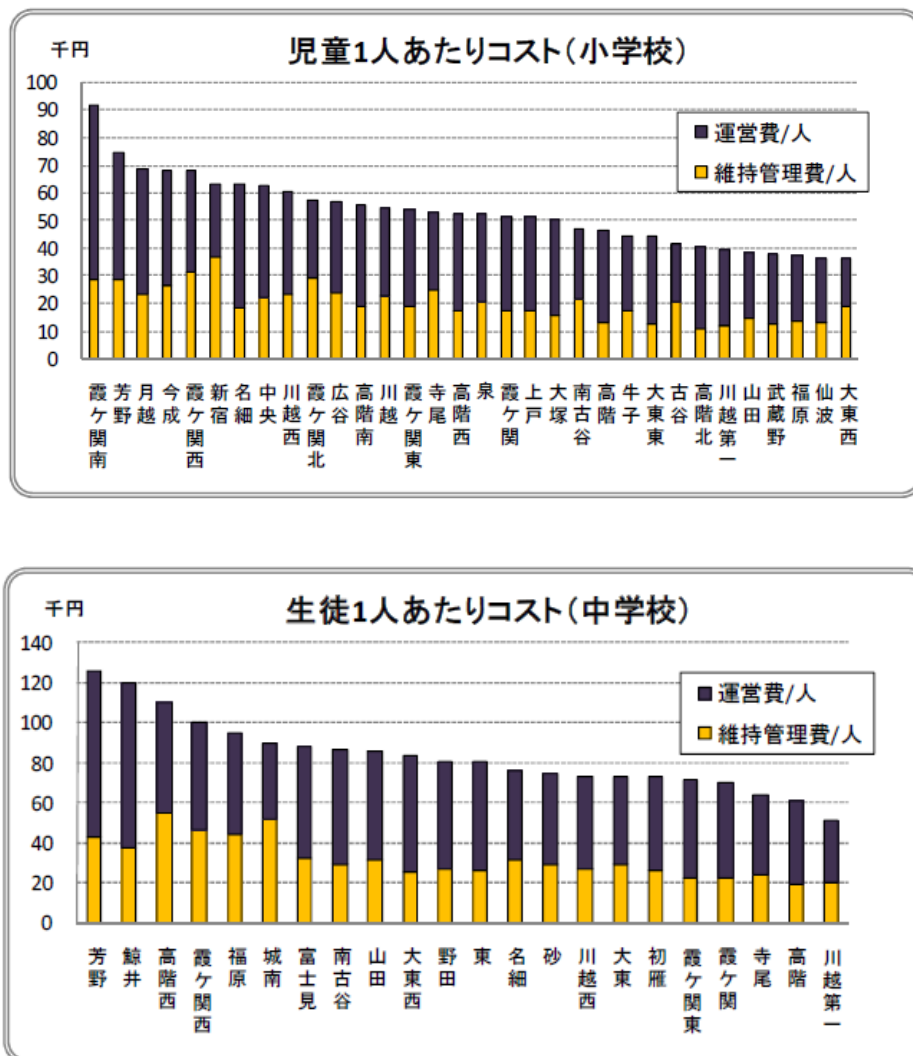


出典：川越市個別施設計画（公共施設編）令和 2 年 10 月を基に学校管理課で作成。

② 運営コストと更新費用

学校運営に係る費用について、「川越市公共施設マネジメント白書（平成 25 年 3 月）」によると、平成 23（2011）年度のコストとして、小学校は合計で約 23 億 2,000 万円、1 校当たり約 7,250 万円、中学校は合計で約 12 億 7,000 万円、1 校当たり約 5,790 万円でした。

図表 14 【児童生徒あたりのコスト】



また、学校施設の更新に要する費用について、「川越市個別施設計画（公共施設編）令和 2 年 10 月」による校舎の更新単価は 311,400 円/m² となっており、今後、令和 17（2035）年度までに更新時期が到来する小学校 11 校及び中学校 4 校の延床面積を乗じると、およそ 350 億円が見込まれます（平均すると 1 校、約 23 億円）。

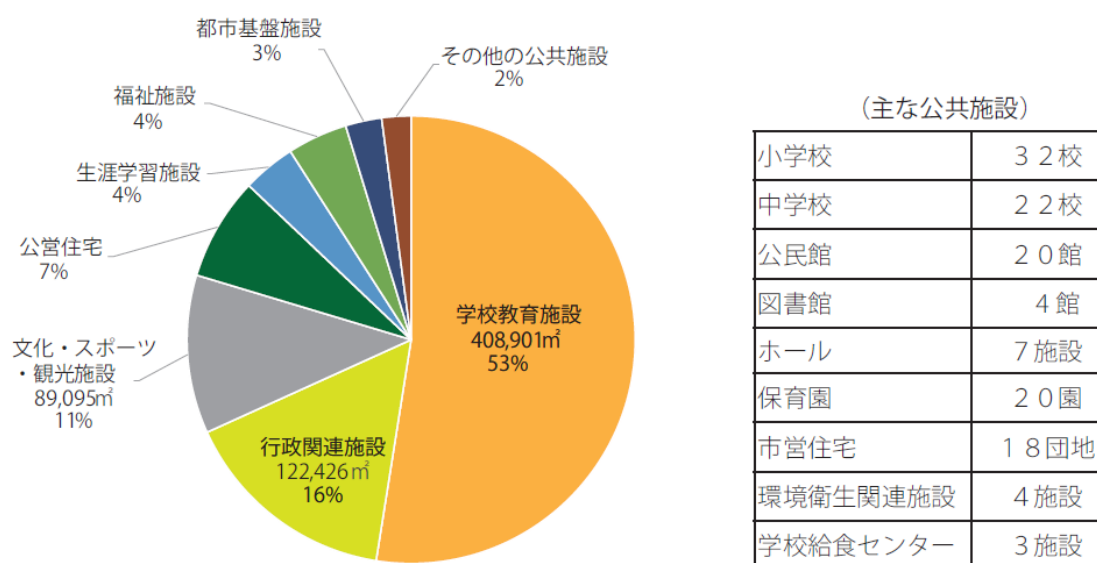
③ 公共施設等総合管理計画との連携

本市では、平成 28 年 6 月に老朽化が進行する公共施設等の更新、統廃合、長寿命化などに計画的に対応するための方針として「公共施設等総合管理計画」を策定し、小学校・中学校の「マネジメント方針」として次のとおり示しています。

- 活力ある学校づくりを進めるため、義務教育学校に係る国の施策や地域への影響などにも留意しながら、地域ごとの児童生徒数の推移に応じた学校の配置や学校規模の見直しなどについて検討します。
- 本市における公共施設の最適配置に向け、学校施設と他の公共施設との複合化について、今後の在り方を検討します。
- 全ての学校で耐震化は完了しているため、計画的に改修を行い、長寿命化を図ります。
- 学校施設を有効に活用するため、児童生徒の安全性や利便性を十分に確保したうえで、学校図書館、体育施設の共用化を検討します。
- プールについては、近隣の民間施設の活用を検討します。

今後、施設の更新時期を捉えて適正規模・適正配置を検討する際は、学校規模等の地域の実情に応じ、同校種との集約化（統合）や異校種間での複合化（小中の一体化）、施設の共用化など、学校施設の適正化を検討していく必要があります。

図表 15 【公共施設（施設類型別）保有面積内訳】



出典：第四次川越市総合計画（後期基本計画）R3～R7年度

参考：学校教育施設は、小学校 32 校、中学校 22 校、市立高等学校及び市立特別支援学校。

2 児童生徒数等の状況

(1) 小中学校の現況（令和6年度）

令和6年5月1日時点で、各小学校の通常学級に通う児童数の最大は、南古谷小学校の966人で学級数は29学級となっています。

最小は、霞ヶ関南小学校の206人で学級数は8学級となっており、比較すると、およそ児童数で4.7倍、学級数で3.6倍となっています。

図表 16 【児童数・学級数の現況】

R6年度	1年生 (人)	2年生 (人)	3年生 (人)	4年生 (人)	5年生 (人)	6年生 (人)	児童数 (人)	学級数 (学級)
川越第一小	101	112	104	110	106	107	640	21
川越小	83	97	80	101	91	101	553	18
中央小	70	77	81	75	80	93	476	17
仙波小	114	118	132	130	121	141	756	24
新宿小	80	95	97	95	120	97	584	19
大塚小	80	68	79	66	76	63	432	15
泉小	73	78	92	88	81	81	493	18
月越小	43	62	55	38	60	35	293	12
今成小	52	71	55	61	56	63	358	13
芳野小	37	42	45	51	58	52	285	12
古谷小	68	70	72	64	62	76	412	13
南古谷小	137	159	151	154	174	191	966	29
牛子小	68	55	65	69	72	75	404	13
高階小	137	117	105	131	111	121	722	23
高階南小	62	74	77	57	74	55	399	15
高階北小	98	108	86	103	87	92	574	19
高階西小	84	76	66	92	83	87	488	17
寺尾小	61	62	65	71	67	65	391	13
福原小	114	89	107	100	118	133	661	22
武蔵野小	115	125	113	97	114	79	643	22
大東東小	87	80	91	89	88	84	519	18
大東西小	94	75	83	93	84	117	546	18
霞ヶ関小	101	84	99	106	101	113	604	19
霞ヶ関南小	30	31	39	31	31	44	206	8
霞ヶ関西小	68	65	103	88	130	111	565	17
霞ヶ関北小	84	52	68	80	72	76	432	15
霞ヶ関東小	52	39	46	48	58	60	303	13
川越西小	76	70	83	86	78	109	502	18
名細小	78	94	107	103	86	103	571	19
上戸小	90	79	78	81	95	88	511	18
広谷小	46	56	55	60	73	63	353	13
山田小	108	96	113	97	119	131	664	22
市立小学校	2,591	2,576	2,692	2,715	2,826	2,906	16,306	553

令和6年5月1日時点で、各中学校の通常学級に通う生徒数の最大は、城南中学校の563人で学級数は15学級となっています。

最小は、芳野中学校の143人で学級数は6学級となっており、比較すると、およそ生徒数で3.9倍、学級数で2.5倍となっています。

図表 17 【生徒数・学級数の現況】

R6年度	1年生 (人)	2年生 (人)	3年生 (人)	生徒数 (人)	学級数 (学級)
川越第一中	161	177	176	514	15
初雁中	151	173	148	472	13
富士見中	114	122	115	351	10
野田中	95	83	98	276	9
城南中	182	195	186	563	15
芳野中	47	41	55	143	6
東中	110	114	123	347	10
南古谷中	169	153	154	476	13
高階中	153	146	149	448	12
高階西中	91	78	108	277	8
寺尾中	109	130	139	378	11
砂中	112	138	143	393	11
福原中	132	122	140	394	12
大東中	166	200	189	555	15
大東西中	84	126	99	309	10
霞ヶ関中	134	133	143	410	12
霞ヶ関西中	133	127	104	364	11
霞ヶ関東中	106	116	89	311	9
川越西中	102	107	117	326	9
名細中	160	161	206	527	15
鯨井中	77	118	100	295	8
山田中	117	114	108	339	10
市立中学校	2,705	2,874	2,889	8,468	244

出典：図表 16 及び図表 17 とも、令和6年5月1日現在の「学校基本調査」の「児童数」及び「生徒数」並びに「学級数」における「通常の学級」の計の数値（特別支援学級を含まない）。

(2) 今後の見込み（令和12・18年度）

令和6年度に小学校入学前である本市に住民登録されている子どもの数から、6年後の令和12年度における各小学校の児童数を算出して、児童数が多い順に並べてみると次の図表のとおりです。

最小規模の小学校では、全学年の単学級化が予測されます。

図表 18 【児童数・学級数の見込み】

	R6年度		R12年度		増減	
	児童数 (人)	学級数 (学級)	児童数 (人)	学級数 (学級)	児童数 (人)	学級数 (学級)
南古谷小	966	29	771	24	-195	-5
仙波小	756	24	727	24	-29	0
高階小	722	23	685	23	-37	0
高階北小	574	19	604	19	30	0
川越第一小	640	21	575	19	-65	-2
泉小	493	18	563	18	70	0
福原小	661	22	561	19	-100	-3
大東東小	519	18	533	18	14	0
霞ヶ関小	604	19	531	19	-73	0
上戸小	511	18	506	18	-5	0
新宿小	584	19	486	18	-98	-1
武蔵野小	643	22	485	17	-158	-5
山田小	664	22	472	17	-192	-5
高階西小	488	17	461	15	-27	-2
川越小	553	18	455	15	-98	-3
名細小	571	19	444	16	-127	-3
大東西小	546	18	399	13	-147	-5
高階南小	399	15	395	14	-4	-1
大塚小	432	15	389	13	-43	-2
中央小	476	17	372	14	-104	-3
霞ヶ関西小	565	17	358	14	-207	-3
寺尾小	391	13	351	12	-40	-1
牛子小	404	13	348	12	-56	-1
月越小	293	12	339	12	46	0
霞ヶ関北小	432	15	323	12	-109	-3
川越西小	502	18	320	12	-182	-6
霞ヶ関東小	303	13	314	12	11	-1
今成小	358	13	307	12	-51	-1
古谷小	412	13	285	11	-127	-2
広谷小	353	13	249	12	-104	-1
芳野小	285	12	178	7	-107	-5
霞ヶ関南小	206	8	152	6	-54	-2
市立小学校	16,306	553	13,938	402	-2,368	-151

令和 6 年度に中学校入学前である本市に住民登録されている子どもの数から、6 年後の令和 12 年度及び 12 年後の令和 18 年度における各中学校の生徒数を算出し、生徒数が多い順に並べると次の図表のとおりです。

最小規模の中中学校では、全学年の単学級化が予測されます。

図表 19 【生徒数・学級数の見込み】

	R6年度		R12年度		R18年度		対 R6増減	
	生徒数 (人)	学級数 (学級)	生徒数 (人)	学級数 (学級)	生徒数 (人)	学級数 (学級)	生徒数 (人)	学級数 (学級)
川越第一中	514	15	602	17	548	15	34	0
城南中	563	15	559	15	452	13	-111	-2
大東中	555	15	631	18	444	13	-111	-2
高階中	448	12	434	13	401	12	-47	0
寺尾中	378	11	477	14	392	12	14	1
初雁中	472	13	499	14	380	12	-92	-1
砂中	393	11	373	12	322	10	-71	-1
南古谷中	476	13	449	12	315	9	-161	-4
名細中	527	15	478	14	312	9	-215	-6
野田中	276	9	314	9	296	9	20	0
富士見中	351	10	356	11	293	9	-58	-1
霞ヶ関中	410	12	341	11	292	9	-118	-3
霞ヶ関東中	311	9	296	9	269	9	-42	0
東中	347	10	317	9	258	8	-89	-2
鯨井中	295	8	269	9	248	8	-47	0
福原中	394	12	362	11	236	7	-158	-5
高階西中	277	8	267	9	218	6	-59	-2
山田中	339	10	342	10	193	6	-146	-4
川越西中	326	9	290	9	188	6	-138	-3
大東西中	309	10	255	8	188	6	-121	-4
霞ヶ関西中	364	11	316	10	170	6	-194	-5
芳野中	143	6	131	6	82	3	-61	-3
市立中学校	8,468	244	8,358	214	6,497	167	-1,971	-77

出典：図表 18 及び図表 19 とも、令和 12 年度及び令和 18 年度の児童生徒数は、令和 6 年 5 月 1 日時点で、本市に住民登録されている者から、平成 21（2006）年 4 月 2 日から令和 6（2024）年 4 月 1 日までの生年月日の者を抽出し、以後も異動することなしに各学齢に達したと仮定して算出した数値（自然増減及び社会増減は考慮していない）。

図表 18 及び図表 19 とも、令和 12 年度及び令和 18 年度の市立小学校又は市立中学校欄の学級数について、令和 6 年度の学級数は 5 月 1 日学校基本調査の実学級数を合計したもの、令和 12 年度及び令和 18 年度の学級数は、市立小学校又は市立中学校の全児童数又は全生徒数を学年ごとに、県教育委員会の定める学級編制基準で除して得た学級数の合計。

※ 別冊【令和 6 年度 小中学校の児童生徒数・学級数の推移】参照

3 適正規模・適正配置

(1) 学校規模の標準

学校規模については、学校教育法施行規則（昭和 22 年文部省令第 11 号）第 41 条において「小学校の学級数は、12 学級以上 18 学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。」と規定（同省令第 79 条によって中学校に準用）しています。

また、この標準は、同条「ただし書」にあるように弾力的なものであり、設置者が「それぞれの地域の実情に応じた最適な（中略）学校規模を主体的に検討することが求められて¹⁾」いるとされています。

本市では、平成 30 年 3 月に「今後の川越市立小中学校の在り方に関する検討委員会」での検討を踏まえ、「川越市立小中学校における適正規模・適正配置及び検討の方針」を定めており、適正規模の範囲を次のように整理しています。

図表 20【市立小中学校の適正規模】

(単位：学級)

分類 学校種	過小 規模	小規模			適正 規模	大規模	過大 規模
		①	②	③			
小学校	1～5	6	7～8	9～11	12～24	25～30	31 以上
中学校	1～2	3	4～5	6～8	9～24		

※学級数に、特別支援学級は含まない。

適正規模の下限については、「全学年でクラス替えを可能とし」、「中学校について」、「少なくとも 9 学級以上を確保することが望ましい」という文部科学省の考え方²⁾に基づき、また、上限については、「文部科学省では、従来から 25 学級以上の学校を大規模校³⁾」としており、「義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令」では、「5 学級以下の学級数」の学校と標準学級数の「学校とを統合する場合においては、24 学級まで」を適正な規模とすることなどから、**24 学級を適正な規模の上限**としています。

1.2.3 「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（平成 27 年 1 月 27 日）文部科学省（2 頁、9 頁、14 頁）

また、学校規模に応じた「検討の方針」として、学校の全学年で単学級になる規模（小規模①）については、「統廃合等により、適正規模に近付けることを速やかに検討する」としており、「地域の実情に応じた最適な学校規模を検討する」必要があります。

図表 2 1 【市立小中学校の在り方の検討方針】

分類	学級数	在り方の検討方針
過小規模	小：1～5学級 中：1～2学級	学級数及び児童生徒数の推移や傾向等を注視し、学校統廃合等により適正規模に近付けることを速やかに検討する。
小規模①	小：6学級 中：3学級	
小規模②	小：7～8学級 中：4～5学級	学級数及び児童生徒数の推移や傾向等を注視し、今後の当該校の在り方を検討する。将来的に更なる小規模化・大規模化が見込まれる場合、学校統廃合等により適正規模に近付けることの適否を検討する。
過大規模	31学級以上	
小規模③	小：9～11学級 中：6～8学級	学級数及び児童生徒数の推移や傾向等を確認するとともに、今後の教育環境の在り方を検討する。
大規模	25～30学級	

※学級数に、特別支援学級は含まない。

（２）適正配置の考え方

学校の配置については、「児童生徒の通学条件を考慮することが必要」で、「徒歩や自転車による通学距離としては、小学校で4 km以内、中学校で6 km以内という基準はおおよその目安として引き続き妥当である」と示されており¹、「適正配置」とは、通学区域内の学校までの通学距離として捉えることが一般的になっています。

本市が定めた「川越市立小中学校における適正規模・適正配置及び検討の方針」においても、「通学距離が、小学校にあってはおおむね4 km以内、中学校にあってはおおむね6 km以内であること。または、通学時間がおおむね1時間以内であること。」としています。

本市の市立小中学校の通学区域については、前述の距離内で設定されています（教育事務を他市に委託している一部の通学区域を除く）。

¹ 「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」（平成27年1月27日）文部科学省（15頁）

「小中学校の適正規模・適正配置に関する資料集」

正誤表

No.	頁	場所	誤	正
1	2	「出典」中、2行目	特別支援学校を～	特別支援学級を～
2	4	「出典」中、3行目	<u>5</u> 年の推計人口～	<u>6</u> 年の推計人口～
3	15	「出典」中、1行目	図表 <u>14</u> 及び図表 <u>15</u>	図表 <u>16</u> 及び図表 <u>17</u>
4	17	「出典」中、1行目	図表 <u>16</u> 及び図表 <u>17</u>	図表 <u>18</u> 及び図表 <u>19</u>
5	〃	最終行、別冊の名称中	<u>中学校</u> の児童～	<u>小中学校</u> の児童～